

ムカシトンボ

ムカシトンボの胴体は不均翅亜目のサナエトンボ類に似ているが、翅は均翅亜目のイトトンボやカワトンボ類に似ている。

トンボは均翅亜目から不均翅亜目(トンボ亜目)が分岐したと考えられているが、ムカシトンボは両方の特徴を持っていて、2つの亜目のつながりを示す原始的なトンボとされる。このため「生きている化石」といわれているトンボである。ジュラ紀の生き残りで、現在はヒマラヤと日本にのみ現存すると言われてきたが、2012年5月31日発表(アメリカ Public Library of Science、吉澤和徳・北海道大学 共著)によると、「約2万年前の氷期には南アジアから東アジアにかけて広く分布しており、現在の分布は遺伝子解析の結果極近い種類が日本、中国東北部、ヒマラヤ地域に現存する。」との事である。(ここでも中国が参加してきたが山深い国なので何が見つかっても不思議ではない・・・か)

ヤゴは渓流域で7年も生活するが、その長い間、生息地の環境が安定している必要がある。一度生息が途絶えれば、二度と帰らないデリケートな存在である。伊豆地域では松川湖上流、伊豆市地蔵堂、伊豆市筏場、伊豆市天城で幼虫(ヤゴ)が見つかっている。

地蔵堂の「萬城の滝いきものふれあい観察会」で毎年ムカシトンボのヤゴが多数見つかる。今年こそ成虫の写真が撮れないかと春の地蔵堂川に出かけてみた。一度足を運んだだけが見事の中して、羽化が始まっているムカシトンボをキハダの大木に発見した。時間は午前10時。それからカメラを三脚にセットして、成虫になるのを待ち構えた。11時になってもその気配がない。12時、尻尾が丸く膨らんで体の中の水を排出し始めた。ときどき苦しそう?に体を小刻みに震わせている。12時30分、一向に飛び立とうとする気配がない。



昼には戻るといって家を出てきたのでもう帰らなければ・・・と撮影を断念した。翌日再訪すると、イベントの後のむなしさのように抜け殻が風に揺れていた。



水のきれいな渓流域の森林が伐採や開発などにより各地で消失しているため、ムカシトンボの生息域は各都道府県に数箇所ほどの割合となっている。